

「発達を支える」とは ライフへのまなざし

関谷 眞澄

Support for Development of Child

Perspective of Life

Masumi SEKIYA

「保育」という仕事の意義と目的は、「子どもの発達を支える」「親（保護者）の子育てを支える」「地域の子育てを支える」ことであると言われる。本稿では改めて「保育」という言葉の示すことや、「発達」の捉え方、「こどもを理解する」ための視点、そして何を目指しての「援助」か、ということについて問い直した。根本に立ち戻り考えていくことが、こどもを理解すること、育ちを支えることにつながる。それはまた、「保育」にかかわる人に必要な問いでもある。

1 はじめに

「保育」の目的は、こどもの発達を支えること、そして親の子育てを支えることである。そして「こどもの最善の利益」を保障する立場に立つことを求められる仕事である。

こどもの発達を支えるとは、子育てを支えるとはどのようなことなのか。そして保育士としてかかわる目の前のその子やその親にとって本当に必要な援助が行われるために、保育士にはどのような視点が求められるのか、発達支援、子育て支援のための専門性とは何か。そのようなことが具体的に論じられているだろうか。保育士を目指す学生たちは「保育」という仕事や「保育士」という立場に立つ自分が何をなすべきか、どのようにこどもたちや保護者にかかわっていききたいか、考えているだろうか。

確かに講義や実習先において保育士の責務や役割について教えられてはいる。しかしそれが学生にとって与えられた知識、理解にとどまっているだけとは言えないだろうか。「保育ってなんだろう」「どうかかわっていくことがこどもたちにとって大事なことなんだろう」「こどもの幸せってなんだろう」…など自ら問いかけてきたらどうか。与えられた知識、覚えなくてはいけないという姿勢での知識は言葉だけのもので本質的な理解にはいたらないで終わってしまう。そのような知識はいくら積んでも、臨床の場において保育士としての専門性にはつながらず、保育士の役割遂行を助けるものにはならないだろう。ましてやこどもやそ

の親（保護者）の援助に役立つものではないだろう。

「発達支援」「子育て支援」が言葉だけの理解で終わらず、保育現場で実践されていくためには、保育士一人ひとりが自分なりの「こども観」「発達観」そして「保育」の理念を持つことが必要である。

本稿では、「保育とは何か」その語源から立ち返り、「保育」という言葉の示す意味と保育の意義を考えたい。そして発達を支え、子育てを支えていこうとする時に持つべき視点や、発達の捉え方や子どもの姿の捉え方、親と子の関係を見る視点などについて論じていきたい。

なお本稿においては、実父母のみでなく義父母や諸事情によって養育にあたっている祖母など、その子を実際に育てている「おとな」を「親」と記載する。

2 「保育」とは

1) 「保育」の意味

「保育」とはどのような仕事であるのか？その役割は何か？その目的と意義を改めて問い直してみたい。まず「保育」という言葉の意味を考えてみる。

「保育」の「保」が付く単語には、保安、保温、保護、保健、保持、保湿、保守、保障、保全、保存、保養、保冷、などが思い浮かぶ。これらの単語から「保」の意味することは、「たもつ」「まもる」と言える。辞書的にも「保」という文字の成り立ちは、「人が赤子を背負っているさまで、養い育てる意」であるとされる（福武漢和辞典、1999年版、ベネッセコーポレーション）。

そして「保育」の「育」の付く単語には、育児、育成、育毛、教育、飼育、体育、発育、養育、療育、などがあり、「そだつ（生長する）」「そだてる（はぐくむ、生長させる）」という意味がある。文字の成り立ちから、「子どもを肉づきよく『そだてる』意を表す」という（福武漢和辞典、1999年版、ベネッセコーポレーション）。

「保育」とは第一に、「こどもをすくすくと育てること」とであると言えよう。「すくすくと育つ」ということは体がきちんと成長していくことであり、こころも育っていくことである。

2) 保育士の役割…「保育」とはどのような役割を持つ仕事か

こどもが「すくすくと育つ」ためには、おとながこどもを守り養っていくことが必要であり、「親」の責任でもある。

保育士はその子の生物学的な「親」ではないが、その子を保育の場で預かっている時間はその子にとって「親」の代わりとなる存在であろう。延長保育や深夜保育などによっては「親」より長時間をこどもたちと過ごす存在でもある。人の発達において最も可塑性のある乳幼児期に親密な存在となる保育士がこどもの「育ち」に与える影響は大きい。であるからこそこどものからだところの成長をはぐくんでいくことが「保育士」の役割であり、「こどもの発

達を支える」という保育の目的につながる。

また我が子を日々直接的に育てていくのはその「親」であるが、こどもたちが健やかに育っていくためには、「親」だけでなく周囲の「おとな」が、そして社会全体が、こどもの安全を守り、その成長を見守っていくことが、こどもの「育ち」を保障していく。

保育士は言うまでもなく、「保育」という領域の「専門職」とされる職種である。保育士自身がこどもたちに適切にかかわっていけるだけでは、「専門職」として充分とは言えない。「専門職」であるからには、そのニーズを持つ他者（「親」や関係者）に対し適切な助言ができなくてはならない。情報提供や相談にのることも役目である。その子の発達や躓き、障害特性などについて保育士としての見解を示さなくてはならないこともある。それは「子育てを支える」ことにつながっている。「親の子育てを支える」ことも「保育士」の責務であり、保育の目的である。

また親と子は「家族」のなかだけで生活しているわけではない。地域社会のなかで生きている。子育てをしやすい地域社会であるか否か、たとえば、身近な他者のまなざしが好意的か拒否的か、困った時に相談できる場があるか、周囲が無関心か、サポートシステムがある地域か、などにより子育ての負担や不安は軽くもなり重くもなる。保育の場（「保育所」や「幼稚園」など）がその地域社会と親和的な関係であること、連携が取れることは、間接的ではあるが、「子育てを支える」ことにつながり、「地域での子育て」の芽となろう。

親とともに周囲のおとながこどもを育てていこうとする姿勢、それが社会としての「子育て支援」の基本的な姿勢であろう。

「保育」とはどのような役割を持つ仕事か、それは「こどもの発達を支え、促す」ものであり、「親の子育てを支える」、「地域社会での子育て支援」ではないだろうか。

3 こどもの姿を理解するために

1) ライフという視点

「生きる」ということは一日一日の積み重ねである。昨日があり、今日がきて、明日に続く。そして一年経ち2年過ぎ、日々の繰り返しのなかで人生の終わりにいたる。「いま」いる自分は生まれてから「いままで」の自分と切り離すことはできない。良くも悪くもいままでの積み重ねの姿である。「いまから」の自分にも「いままで」と「いま」の自分のあり様が反映する。私たちが目の前にする「その人」はいまの姿だけがその人のすべてではない。その人の過去（いままで）と将来（いまから）もその人の姿である。他者を理解しようとするにはいまのその人に意識を向けるだけでは一面しか理解できない。その人の生きてきた時間に目を向けることが大切である。同時にその人のいまからの時間に目を向けることも、いまのその人を知る手掛かりとなる。

筆者は、年度最初の講義時に「なぜ保育士になりたいのか」をアンケートしている。毎年理由としてあげられるのが、「自分が保育所（または幼稚園）に通っていた時の保育士（または先生）に憧れて、自分もそうなりたと思った。」というものである。「こどもが好きだから」という理由と並んで多くみられる。乳幼児期の体験がその学生の「短大生」という「いま」につながり、「保育士」という将来につながっていく。つまり過去が現在と将来を規定しているのである。保育士になろうとしているその学生の動機を理解することでその学生のいまの思いをより鮮明に感じることができる。また見方を変えてみると、その学生がいま勉学に励んでいるのは「あの先生のような保育士になりたい」という気持ちによるものであるとしたら、その学生の将来への思いがいまのあり様を方向づけている、と言える。「将来」という時空間が「いま」という時空間を決めているのである。

人は誰しもそれぞれの人生を生きている。自分自身に起こったできごとをどのように感じ取り、意味づけていくかは、その人のいままでの体験に影響される。例えば、過去にトラブルを生じ、わだかまりを残している相手と一緒に行動することは気が進まないものであろう。待ち合わせがすんなりいかなかっただけでも相手への否定感情が生じたり、相手が自分のことを嫌がっていると思ったり、この先の日程がうまくいくはずがないと暗い気持ちになったりする。単なるタイミングのずれが「だから、やっぱり…」という必然的なものに意味づけられて、ますます関係をぎくしゃくしたものにしてしまう。逆に楽しい体験を分かち合った相手であると、行き違いもあまり気にならなかつたりする。

「いま」が過去の意味合いを左右してもいく。たとえば第一希望の大学受験に失敗し不承不承滑り止めの大学に入学しても、専門科目にも興味が持て、気の合う友人もでき、進路もみえてきて、そこでの生活が楽しく感じられる場合、受験の失敗は「よかった」こととして受け止められるだろう。滑り止めの大学での生活が楽しくなければ、不本意なままの生活となり、「あの時受かっていたら…」という後悔と未練のまま過ごし、過去を受けいれられないいまかもしれない。

体験はその時だけのものでなく、過去と将来に連なるものである。生じうるできごとの意味も、人生の文脈が変われば違うものとなる。体験はその時だけの細切れのものではなく、過去と将来に連なるものである。つまり生じうるできごとをどう自己と結びつけるかも、その人の人生の文脈が変われば違うものとなる。できごとの意味は、その人の捉え方によって異なる。例えば挫折体験を「あの体験があったからこそ」と思えるか、「あれさえなかったら」と悔やみ続けるかは、その人の個性にもよるだろうし、＜いま＞の状況や将来の見通しにもよるだろう。その人自身の背景（歴史）を知ることが、表面的ではない人間理解につながる。目の前の人を理解しようとするには、その人の＜いま＞を知るだけでなく、＜いま＞につながる＜いままで＞と＜これから＞の思いを知ることが重要である。心理的にその人に近づく

ことは、リアリティをもった理解となる。

2) こどもの背景をみる

保育士として、目の前にいるその子を理解しようとするために大事なことがいくつかある。

まずはいまの姿をよくみることである。目の前で動いているその子の動き、表情、他の子とのかかわり方、声の調子、など一つひとつの事象を丁寧に観察していくことである。またその時間の流れのなかで細切れのものとしてではなく、時空間のつながりとともに捉えていくことが大切である。目の前の姿を「そのままにみる」ということは、自分の先入観をできるだけはさまずに、「良い悪い」の評価をせずにみていくことである。

そしてその子の行動の意味を考えていくことが重要である。なぜそうしたのか、その理由やその状況との関係、心情に目を向けることである。たとえば隣で遊んでいる子とのトラブルが生じた時にその経過や双方の言い分を充分聴くことは、言うまでもなく大事なことである。いけないことはいけないこととして伝え、どうすべきであったのか教えていくことが基本にある。ただその子の心情をより深く理解するためには、そのような行動をとってしまった気持ちをしっかりと把握することが必要である。それはその時の気持ちの動きを理解するだけではない。前の日に家庭で何かあったか、親子の関係で変わったことはないか、親子関係や家族自体の様子を把握し、その子への影響を鑑みることを抜かしてはならない。その子の背景を常につかんでおこうとする姿勢がその子をより理解するために大事である。

同時にその子のこれまでの成育歴、親子関係の経緯や変化をできるだけわかっていると理解の助けとなる。それには親から話してもらえる保育士でなくてはならない。信頼される保育士に対してしか、親は本意を語らないだろう。

対象理解とは一側面から対象を捉えるのではなく、多方向から対象を捉え、また対象の背景にまなざしを向けるからこそ可能になろう。そうでなければ、それは「思い込み」に過ぎず、そのかわりは「援助」とは程遠いもの、援助者の自己満足に終わってしまう危険性をもつことになろう。

3) 「発達」への視点

(1) 「獲得」の過程としての「発達」― 学生の学びにおける「発達」

「保育」関連の講義において学生たちは「発達」について学ぶ。こどもの発達過程、発達段階を知ることは適切な保育を実践していくうえで欠かせない基本となる知識である。そこでまず学ぶ「発達」は何かができるようになっていく過程である。身体・運動面、対人・社会面、言語面、認知面など各領域においてどのように能力を獲得していくか、生活年齢という横軸において捉えていく。「発達」は成長の過程であり、「獲得」の過程として提示される。

こどもの発達段階を適切に見極めることは、こどもの発達を保障し育んでいくために必要であり、専門職として要求される力である。こどもの潜在している可能性が顕在化していくきっかけとなるような活動を展開していく試みが、保育の場に求められるであろう。

こどもの発達段階を適切に見極めることは、同時にその子の「躓き」に気づくことでもある。そしてその「躓き」に対応し解決を図ることが発達を支えるために重要となる。「躓き」が一時的なものなのか、「障害」なのかの見極めができる能力も専門職として必要である。

(2) 「できる」ということ

何かができるようになる、ということには2つの側面があるのではないだろうか。ひとつは技能が増えること、もうひとつは技能が使いこなせることである。例えば料理のレパートリーが増えることも「できるようになる」ということである。そしてひとつの料理において手際がよくなることや教本と違う材料（ありあわせの食材）でも作れること、それも「料理」において大切な技能である。

しかし今の社会では、多くのことができるようになることや高度と言われることができるようになることが重要視され、発達段階を無視した期待がこどもにかけられ、こどもの価値までもが量られているように感じられる。先ほどの「料理」の例で言うなら、レパートリーが増えることや教本通りに作れること、高級料理が作れること、などが「料理」の能力として認められることになる。その場の食材で、その場の調理器具で、その時の予算で作ることや、食べる人の体調や好みに合わせて調理することは、「評価」対象にされない。毎日の「料理」として、生活していくうえで、まず大切なのはどちらであろうか。

能力はあるが他者と協調できない、決まったやり方でしかできない、環境が整わないとできない、100か0かしかない、そのようなこどもやおとなが増えてきているように思われる。それは「できる」ということの意味の履き違い、偏った意味づけの結果ではないだろうか。

(3) 「喪失」と「獲得」

人の心身の成長には限りがある。「成長」の次には「停滞」があり、「衰退」し「老化」していく。それが生物としての自然である。できるようになることばかりが重視されていくと、ある時期からの「加齢」が否定されるものとなる。しかし「衰えていく」ということ、「失う」ということは意味のないことなのであろうか。

「生きる」という過程は「獲得」と「喪失」の繰り返しである。

「生物」としてその存在維持のために細胞は新陳代謝を繰り返す。絶えず新しい細胞に変わることが「生きる」作業である。そこには古い細胞の「死」と新しい細胞の「生」がある。「死」があって「生」があるのか、新たな「生」のために「死」があるのか、どちらにせよ生死は一体である。

私たちの発達の過程も実は「獲得」ばかりではなく、「喪失」の過程でもある。乳児は感情

のままに泣き、笑い、要求する。それは他者にケアされなければ生きていくことができない存在である乳児の生きる手段である。乳児はその後「発達」していく。言葉を覚え、自分の身体を自分の意思にそって動かすことができるようになり、他者の存在を認識し、自分の感情や感情表現をコントロールする（しなくてはならない）ことを身につけていく。それは言語力の「獲得」であり、認知力や社会性の「獲得」である。乳児期から幼児期、児童期、青年期…と成長過程で体が大きくなるだけでなく、多くの能力を「獲得」していく。それは社会で生きるために必要とされることである。しかし「おとなになる」ことで失っていくものもある。たとえば、自分の感情を自由に表現できなくなる、その場の状況を考え表現の仕方や表現していいのかも考え、場合によってはその感情自体を抑え、周囲に合わせて行動する。それが「社会性」「協調性」として評価される。それは幼いころの自分への自由さや感性を失っていくことでもある。また中高年期になると体力も落ち、身体機能も損なわれてくる。視覚や聴覚など感覚器官は加齢とともに自然のこととして衰えていく。精神機能も物忘れが増え、反応が鈍くなっていく。生命体として下りの曲線にはいつていく。「喪失」の過程である。

では「喪失」の持つ意味は何か。「老化」は安らかな「死」への準備であろう。徐々に「失っていく」ことで私たちは生物として「終末」を受け入れていけるのではないか。あまりに「若さ」や「健康」に執着することはこころの平穏に反することになるかもしれない。またこどものころの自由さを失うことは社会で生きていく能力の「獲得」でもある。

そしてまた加齢により高まる能力もある。記憶力は20代過ぎると低下するが、総合的な判断力や推察力などは経験を重ねることで深まるという。人としての人間的な深みもその人の生きてきた軌跡によるだろう。体力はある時期から低下する。その後は体力を維持することが「向上」でもある。そのように基準や価値観を変えることも必要であろう。

（4）たてへの発達と横への発達

「成長」を方向とした「発達」の捉え方においては、能力のピークまでが人の発達、成長の過程であるとされている。たとえば知能検査では10代後半から20代前後までが「成長」の終点でその後は「衰退」、落ちていく過程である。人は成長・発達し、停滞から衰退していく、という見方である。つまり「獲得」のあとは「喪失」していく過程であり、そこへの着目は、「保育」という領域ではあまり深くなされてはいないように思われる。「保育」という仕事が人の育ちゆく時期にかかわるものであるゆえに、「獲得」への着目がより重要になっているのは、当然のことでもある。

しかしながら能力や機能の高まりには限界がある。だからといって「限界」をマイナスと捉えることは間違いであろう。

発達とは「全生涯を通じて常に獲得（成長）と喪失（衰退）とが結びついておこる過程」（田垣 2002：347）であると捉えることも、こどもの発達支援のための大事な視点であろう。「獲

得」のみを意味あるものとしてこどもにかかわってしまうと、時として大きな重圧を与え、発達の芽を摘んでしまうだろう。

さらには、障害を抱える子の発達はゆっくりである。障害を抱えない子と同じところまで到達できないこともある。「限界」もより厳しく存在する。障害による不自由さを抱えながらも「できること」を増やし、可能性を顕在化していくことを目指してかかわっていく（育てていく、援助していく）ことは親や保育士の役目である。しかしそこには「見極め」が必要である。障害の特性とその子の抱える障害の程度を適切に理解し、無い物ねだりにならない目標設定ができなくてはならない。その子の発達段階と障害の特性の理解だけでなく、その相互作用も捉えていくべきである。「できない」のは障害ゆえなのか、発達のペースかという検討、能力の限界なのか、一時的な躓きなのかという検討、それは区別しきれるものではないが、そのような観点で考えることにより、その子への持っている力や可能性を判断する時の手掛かりが広がる。

「保育」において、たてへの発達と横への発達ということが言われる。「できること」が増えていく、より熟達していく。例えば、乳児が寝返りがうてるようになり、はいはいし、つかまり立ちし、伝い歩きから独歩ができるようになる。拙い歩き方がスムーズになり、走ることも獲得する。それがたてへの発達である。横への発達とは、できるようになったことが、いつでも、どこでも、誰にでもできるようになることである。挨拶が必要なときにはいつでも、知っている人に対して、出会った場所ですること、また「待ってて」という指示が母親だけでなくA保育士からでもBちゃんからであっても、理解でき応じられる、多少気分が悪くても我慢して指示に応えられる、そのような「ひろがり」が横への発達である。

たてへの発達だけが大事ではない。横への発達もあってこそ、その能力が「使える」ということであろう。またたてへの発達の限界において横への発達を考えていくことが、その子の生活していく力を育てていくことにもなる。それは障害の有無にかかわらない。

4) こどもをみる視点

「子育て」「保育」の場で私たちはどのような思いやスタンスで目の前のその子をみているのだろうか。私たちは目の前のその子のいまの姿をみているだけではない。目にしているのはいまの姿である。しかしただ観察しているだけではない。多様な思いをもって、その思いを通してみている。例えば、こどもをみながら私たちは色々なことを教えていく。将来こうなってほしいという思いや、おとなになり社会で生きていくのにどう振舞うことが適切かという価値観などによって、こどもにして良いこと悪いことを教える。また「自分のこどものころとは違うな」を感じたり、保育実習で自分が思い描いていたこどもの姿と違いとまどったりする。

子どもを目の前にした時、「親」もしくは「保育士」という立場に立つ「おとな」は3つの時点からその子をみている。それは<いま>と<過去>、<将来>である。

- ・目の前にいる子ども、という「現実の子ども」の姿
- ・将来こうなってほしい姿、望ましい姿、という「理想の子ども」の姿
- ・おとなである私たち自身の子ども時代のこどもの姿、体験のなかのこどもの姿、という「イメージのなかの子ども」の姿

である。

私たち「おとな」はこの3つの「子ども」の姿のなかで揺れ動きながら、子育てをしている。こどものいまの姿とおとなのもつ「理想の子ども」や「イメージのなかの子ども」の姿のギャップがとまどいとなる。そのギャップをどう受けとめるかでかかわりが変わる。いまの姿を認められるか、「理想の子ども」や「イメージのなかの子ども」との折り合いをどう自分のなかでつけていくかである。

また「子ども」をどのような存在としてみるかでかかわり方、育て方は異なる。大雑把なたとえばあるが、こどもは無力であり常に親の保護やケアが必要であると考えるか、こどもにはこどもとしての力があり親の保護やケアは必要最小限にしていくべきである、と考えるかにより自ずと「子育て」の目指すものやかかわりかたは異なってくる。

どのような「子育て」が最良であるとはいえない。こどもの気質、親の気質、親子の関係、家族や地域の状況など、様々な要因がからんでいる。また完全な子育てというものもないだろう。その子との関係のなかで親と子、双方にとってより良いあり方、かかわりを模索していくのが「子育て」であり、それが大事なことである。親と子、双方にとってより良いあり方、かかわりに近づくために、親や保育士は自分がどのような思いで子どもをみているのか、内省することが肝要である。自分の持つ「理想の子ども」や「イメージのなかの子ども」の姿を時々振り返ることや、子どもをみながら自分のなかに生じる感情や気持ちを見過ごさないようにしていくことを心掛けてほしい。

子育てとは自分自身の子ども時代を生き直すことでもある。親がこどもに自分の夢を託す、こどもの喜びや悲しみが自分のことのように感じられ、一緒に喜び悲しむ、それが親であり、親子であろう。だからこそ、そこに子育てのつらさを超える「甲斐」があるのだろう。ただそこで親子が一体になりすぎてしまうと、こどもの人生を親が自分の人生にしてしまう、奪ってしまうことになったり、親自身の人生を見失ってしまう。親子が程良い距離をもっていられることが必要である。親が我が子をひとりの「人」として認めていくことが、こどもを「尊ぶ」ことである。こどもを理解するということは同時に子育てにかかわる「親」や「保育士」が自分自身を知るという作業でもある。そのひとつとして自分自身の「子ども観」―こどもをどのような存在として考えているか―を模索し、言葉にしていくことに目を向けてほしい。

4 子育てと援助

1) 援助の対象 ― 着目すべき対象

保育士としてこどもの発達を支え、親の子育てを援助していくために何に着目していくべきなのか。援助の観点ともいえることについて考えていきたい。

まずは親の姿、こどもの姿をしっかりと「みる」ことである。ニュートラルな目でこまかなしぐさまで見落とさない心構えをもち「みる」、目で見ただけでなく耳でも「みる」ことである。声の調子から感情がみえてくる。継続してしっかりと「みる」ことは、地道なかかわりであるが、その積み重ねで対象の小さな変化に気づくことができる。小さな変化は大きな変化の前触れであり、早期の援助が可能になる。

そして親とこどもを個々の対象として理解するだけでなく、そのうえで両者の「関係」に目を向け、理解していくことが必要である。互いがどのように影響し合っているのか、親とこどもを別々にみていたときには出てこなかったものが浮かびあがる。たとえば、こども虐待の発見に保育所へのお迎えの際の親子の様子が手掛かりになる。こどもが親の許に嬉しそうに駆け寄っていくか、親の姿をみて子どもが緊張する、互いに目を合わせようとしない、こどもが親のちょっとしたしぐさ（手をあげる、顔を向ける、など）にびくつとする、などである。親子の関係に意識をむけていくことが親やこどもを理解していく助けとなる。

さらに親とこどもを取り囲む環境に目を向けることが大切である。最も重要な環境は「家族」である。家族員同士の関係、夫婦関係やきょうだい同士の関係、きょうだいと親の関係などが相互作用し、親子関係に影響している。家族のダイナミクスを理解することがそのなかで生活している家族員一人ひとりを理解するために必要である。

こどもを援助すること、親を援助することは別々のかかわりではない。そして親子を援助するということは、親子の関係を援助することであり、家族を支えることである。そのような意識と広い視野をもって「援助」ということを考えていくことが望まれる。

2) 将来を見据えての援助 ― ライフコースを視野にいれる

生死の危機がない限り、こどもはおとなになっていく。親は我が子より先に人生を終える。親の最も根本的な責任は、親亡きあともこどもが生活していくことができるように育てることである。「子どもの育ち」「子育て」を考えていく時に、その子の将来を視野に入れて考えていかないと、十分な判断ができなくなることがある。

「自立」は子育ての大切な目標である。しかしすべて自分でできるようになることや、経済的な自立イコール自立ではない。精神的な自立のもとに「その子なりの自立」の姿がある。自分ひとりではできないことは他者に援助を頼むことができる、それが生きていくうえで大切な力ではないだろうか。それは他者とのかかわる力である。

「発達を支える」とは ライフへのまなざし

将来我が子が社会のなかで他者とともに生活していくこと、自らが選んだ生活を楽しむことができるように育てていくことが親の責任であろう。そしてその子育てを支えることが保育士の責務であろう。保育士として、その子の将来のためにいまなにをその子に伝えなければならないか、どのようにかかわっていかなくてはならないかを念頭において、日々の保育を実践していくことが、「こどもの幸せ」につながるかもしれない。

[文献]

明石洋子『ありのままの子育て』ぶどう社, 2002年

関谷眞澄「保護者・家庭への支援」青木豊編著『障害者保育』一藝社, 2012年

田垣正晋(2002)「「障害受容」における生涯発達とライフストーリー観点の意義—日本の中途肢体障害者研究を中心に」『京都大学大学院教育学研究科紀要』48, 342—352

山下久仁明『おさんぽいつでもいいよお～ 自閉症児ヒロキと歩んだ十五年』ぶどう社, 2008年